

- 当地域は県内一の柿産地だが、品種が「刀根早生」に偏重、販売農家の高齢化により労働力が不足しており、担い手の確保が喫緊の課題。
- 県オリジナル品種「紀州てまり」等の推進と柿輸出への取組支援、新規就農者の育成・確保、優れた技術の伝承、柿の消費拡大に取り組む。
- その結果、「紀州てまり」導入農家は665戸、「紀州てまり」等の栽培面積は171haに増加。柿の販路確保により、米国向き輸出量は4.2t。新規就農者の育成と定着促進、技術の伝承、柿の消費拡大により、柿産地の活性化につながった。

### 具体的な成果

### 普及指導員の活動

#### 1. 「紀州てまり」の導入推進

- 生産者は増加傾向、栽培面積は増加。
- 有望系統の推進により産地が活性化。  
(R2 → R3)
- ①「紀州てまり」導入農家  
640戸 → 665戸
- ②「紀州てまり等」の栽培面積  
118ha → 171ha (極早生含む)  
うち「紀州てまり」栽培面積  
17ha → 24ha

#### 2. 柿輸出による販路確保

- ロサンゼルスの日系スーパーTokyo Central、Marukai 計10店舗で販売。  
・米国向き輸出量 R3 刀根早生 4.2t

#### 3. 新規就農者の育成・確保、技術の伝承

- 技術指導、個別相談等により経営の安定と定着が進んだ。  
・新規就農者数 R3 8名(見込み)
- 「匠の技 伝道師」の認定と技術の伝承が図られた。  
・高糖度、大玉完熟富有柿の栽培技術  
・匠と継承希望者のマッチング R3 6名

#### 4. 柿の消費拡大

- 柿の歴史や栽培への理解増進。  
・柿の体験学習(渋抜き体験、吊るし柿体験) R3 小学校20校 児童874人
- 消費者の購買意欲向上。  
・直売所等で柿料理レシピ集を配布、パネル展示等 R3 1,925部

#### 令和3年度

- 「紀州てまり」の実証ほを5ヶ所設置し、生産者へ情報提供および技術指導を実施。
- 新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、研修会等の開催が困難となったため、個別で栽培指導を実施。
- 輸出登録園地を月1回巡回調査し、12園地、5生産者の防除指導等の支援を実施。
- 新規就農者に対して巡回指導を実施。
- JAと連携し、新規就農者の相談対応、経営や栽培技術の指導を実施。
- 新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、農業技術講習会が中止となったため、個別指導を実施。
- 匠の技術を伝承するため、富有柿袋かけ研修会を開催。
- 地域の関係機関(市町、JA、農業共済、振興局)と協力し、小学校での体験学習、消費拡大活動を実施。

#### 普及指導員だからできたこと

- 新品種の導入と担い手育成には、地域の関係者と協同が必要不可欠である。**普及指導員だからこそ、地域の関係者をまとめ、産地全体の取り組みを進めることができた。**
- 生産者の経営は様々であり、必要とする支援は異なる。**普及指導員と関係機関との連携により、細やかな指導に取り組めた。**

## 新品種導入と担い手の育成による柿産地の活性化

活動期間：令和3年度～令和5年度

### 1. 取組の背景

本県の柿生産量 43,400t のうち、伊都地方は 28,369t であり、当地域は県全体の柿の 65%を生産する県内一の産地である（令和元年度市町村別統計検討協議会）。しかし、柿栽培面積の 56%を「刀根早生」が占めることから、出荷時期が集中し、販売価格の低迷につながっている。また、販売農家の 3分の2以上が 65歳以上で高齢化が進み、労働力不足と相まって、品種更新の意欲低下に拍車をかけている。

そこで、「刀根早生」偏重による取引価格の低下対策として、和歌山県オリジナル品種の「紀州てまり」の推進と柿輸出への取組支援を行う。また、中・長期的な視点から新規就農者の確保・育成に努め、担い手の技術向上を目的とした農業技術講習会等を開催するとともに、優れた技術の伝承を図るため「匠の技 伝道師」を選定し、継承希望者のマッチングに取り組む。併せて、柿の消費拡大にも取り組み、産地の振興を図る。

### 2. 活動内容

#### (1) 「紀州てまり」等の導入推進

「刀根早生」に「紀州てまり」を高接ぎした実証ほ5ヶ所において、生育調査を実施した。展葉日、開花状況の他、8月3日以降10月26日まで6回果実肥大を調査した。10月25日と11月1日に果実を収穫し、品質調査を行った。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、研修会等の開催が困難となったため、個別で栽培指導を実施した。

8月2日に生産計画や販売方法を、12月17日に販売結果をJA等関係機関と協議した。

#### (2) 柿輸出による販路確保

柿輸出登録園地の病虫害発生状況調査および園地検査のため、米国輸出向け8園地について月1回、巡回調査を行った。令和3年度は一部の園地で灰色かび病やチャノキイロアザミウマ、フジコナカイガラムシの被害果がみられたため、被害果の摘果除去および薬剤散布を指導した。

また、令和4年産の輸出に向けて1月13日に輸出登録園地の防除暦についてJA等関係機関と検討した。1月28日にはJA等関係機関と生産者説明会を開催した。

#### (3) 新規就農者の育成と定着促進及び技術伝承

新規就農者8人に対して巡回指導を行った。JAトレーニングファームと連携し、新規就農者の相談対応を行うとともに、経営や栽培技術の指導を行った。

また、退職帰農者や就農希望者等を対象に農業技術講習会を5回シリーズで計画したが、新型コロナウイルス感染症の影響で集合研修は1回のみで、他回は個別対応に切り替えた。

JA、市町と協議し、富有柿で卓越した栽培技術（高糖度・大玉完熟柿の生産技術）を持つ「匠の技 伝道師」候補に中谷裕一氏を推薦し、6月9日、県知事に認定された。

次世代に匠の技術を伝承するため、8月18日に富有柿袋かけ研修会を開催し、技術継承希望者6名が受講した。1月24日に予定していた、匠による富有柿剪定研修会は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大のため、中止となった。



柿の剪定講習会



匠による袋かけ研修会

#### （4）柿の消費拡大

10月4日～11月25日、伊都地方農業振興協議会（市町、JA、農業共済、振興局で構成）で柿の体験学習（渋抜き体験、吊るし柿体験）を管内および和歌山市、守口市内小学校あわせて20校、児童874名に実施した（表1）。11月7日、11月16日には大阪ガスクッキングスクールと料理教室を開催し31名が受講した。

市町イベントにおける秋の消費PRは、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のために中止となったが、代替として、9月21日～10月28日、高野町観光情報センターにおいて柿消費拡大PRのパネル展示を行った。9月中旬～11月中旬には高野町観光情報センター、かつらぎ町内の道の駅3駅、九度山町内の道の駅、JA やっちゃん広場で柿料理レシピ集1,925部の配布を行った。



柿体験学習

表1 柿の体験学習の実施状況

市町	校数	人数	実施日
橋本市	11	392	10/4～11/25
かつらぎ町	3	97	11/16～11/19
九度山町	1	16	11/12
和歌山市	1	103	10/21
守口市	4	266	10/13～10/15
計	20	874	

### 3. 具体的な成果

#### (1) 「紀州てまり」の導入推進

高接ぎ実証ほの展葉は昨年と同様になり、満開日は昨年より1日程度早くなった。また、展葉期や満開期は標高の高い園地で遅くなる傾向が見られた。収穫日は、昨年はかつらぎ町の園地のみ他の園地よりも早くなったが、本年度は標高の低い園地の方が早くなった(表2)。果実重は、昨年と比較して重くなり、果実の糖度は昨年より高い傾向であった(図省略)。これら実証ほにおける調査結果を取りまとめ、生産者への情報提供および技術指導を行った。

5月の開花期に雨が多かったため、果頂部に灰色かび病の発生が多かった。

また、へたすき果の発生も多く、来年度以降の検討事項となった。

本年は10月26日と11月2日にJAマル学総合選果場にて荷受けが行われ、10月29日と11月5日に211ケース(0.8t)の出荷があった。市場から「食味は良く、着色は良好」、「色付きのわりに硬くてしっかりしている」などの高評価を得た。11月6日、11月7日、東京の百貨店等で販売され、消費者に好評であった。

栽培面での課題は残るものの、「紀州てまり」の市場評価は好評であった。これまでの取組により生産者は増加しつつあり、令和4年1月末までに伊都管内で665名が「紀州てまり」を導入し、栽培面積は24haとなっている。



紀州てまり

表2 令和3年産紀州てまり高接ぎ樹の生育ステージ

調査地区	標高	展葉期	満開期	収穫盛期
橋本市	222m	4月4日(+1日)	5月20日(-1日)	10月25日(-4日)
橋本市高野口町	108m	4月4日(±0日)	5月20日(-1日)	10月23日(-6日)
九度山町①	200m	4月3日(±0日)	5月20日(-1日)	10月27日(-2日)
九度山町②	144m	4月2日(+1日)	5月18日(-1日)	10月29日(±0日)
かつらぎ町	465m	4月7日(-2日)	5月27日(+1日)	10月26日(+4日)

( )内は前年度との日数差

#### (2) 柿輸出による販路確保

柿輸出は新型コロナウイルスの影響もあり、米国向けの「刀根早生」輸出1事例となった。本年は、5戸の生産者とJAの12園地で栽培に取り組み、10月4日に1.2t、10月6日に1.2t、10月11日に1.8tが成田国際空港からAIR便で輸出され合計4.2tを出荷した。輸出した柿は、10月9日からロサンゼルスの日系スーパー計10店舗で販売促進活動が行われた。

柿の輸出に関しては、相手国により使用できる農薬が限定されるため、引き続きJAと協力し、農薬の適正使用などの産地検疫対策に取り組む。



米国店舗での販売状況

### (3) 新規就農者の育成と定着促進及び技術伝承

就農後間もない農業者 8 名に対して個別に経営や栽培技術を指導し、経営の安定化と定着を図ることができた。また、12 月 7 日に JA トレーニングファームと連携し、柿剪定講習会を開催し、技術向上に加え、就農者同士の交流も図ることができた。

農業技術講習会は、新型コロナウイルス感染症の影響で、11 月 25 日の柿の剪定講習のみとなった。受講者 20 名には技術資料の送付や電話対応に切り替え、個別指導を行った。

なお、令和 3 年度新規就農者数は 8 名の見込みである。

また、「匠の技 伝道師」による栽培技術研修では、匠と継承希望者 6 名とのマッチングを行うことができた。次年度も匠とのマッチングを継続し、優れた栽培技術の継承を図る。

### (4) 柿の消費拡大

管内外で柿の体験学習を幅広く実施し、子供たちに柿の歴史や栽培への理解増進につながった。市町イベント等における PR 活動は実施できなかったが、直売所等における PR 活動に取り組んだ。特に、直売所等における柿レシピ集の配布は消費者に好評であり、柿売場における消費者の購買意欲向上の一助となった。

## 4. 農家等からの評価・コメント

### (橋本市 K 氏)

「紀州てまり」の果実は大きくて良食味であり、生産拡大をしたいと考えている。

「紀州てまり」は開花期に降雨が多いと灰色かび病が多発する。従来品種より防除の徹底が必要であると感じている。

引き続き、新品種や新技術の情報提供をお願いしたい。

### (農業技術講習会受講生)

柿の剪定講習では、ていねいな実演で基本がよくわかった。

現地研修は無かったですが、資料や説明で摘果・摘蕾方法について学ぶことができた。

柿の冬季の管理作業である剪定、土づくり、越冬病虫害対策を学ぶことができた。

令和 4 年産の柿づくりに活かしたい。

## 5. 普及指導員のコメント

### (伊都振興局農業水産振興課・副主査・森口和久)

「紀州てまり」は今年度で 2 回目の出荷を迎え、出荷量は増加しつつある。昨年に引き続き、本年度も東京の百貨店等で販売が行われ、消費者からの評価は好評であった。へたすき果や灰色かび病の発生がみられたため、来年度は秀品率を上げる栽培法の実証試験も行っていく。

## (伊都振興局農業水産振興課・主任・間佐古将則)

新型コロナウイルス感染症対策を行いながらの実施であり、計画変更や研修会の中止など、対応に追われた。新規就農者の経営は様々であり、必要とする支援は異なるため、研修会等による技術指導と併せて、今後も巡回指導により細やかな対応を行っていく。

引き続き、関係機関と連携して新規就農者の育成や支援、優れた栽培技術の伝承や柿の輸出支援、柿の消費拡大に取り組んでいく。

## 6. 現状・今後の展開等

「紀州てまり」は苗木での導入も進んでいるため、改植と高接ぎによる産地化を推進していく。当課では苗木の展示ほを設置し、研修会などを通じて苗木管理の指導を行っていく。

また、かき・もも研究所と協力してへたすき果の発生削減や、開花期の長雨による灰色かび病の防除対策について技術検証を進める。

柿の輸出は、引き続き相手国に対応した産地検疫対策の支援を行っていく。

また、生産現場における担い手不足は喫緊の課題であるため、今後も新規就農者の確保・育成に注力していく。